
すべて転んでペプシを飲め

ラド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

すべてで転んでペプシを飲め

【ΖΖコード】

Ζ8412A

【作者名】

ラド

【あらすじ】

「ぐぐぐ普通の中学生一年生の坂井ノリオはある朝突然ペプシの国からきたという少年と出会い・・・ギャグとファンタジーをほどよい濃さでミックスした楽に読むお話！」

一本目「悲劇はある朝突然に」

今日も爽やかな朝が来ました。

部屋の窓からは外の光が差込んでとても眩しいです。

僕の名前は坂井ノリオ。めちゃくちゃ平凡な名前です。好きな食べ物はカレーライス。飲み物はペプシコーラ。嫌いなものは特にありません。

だけど今日は僕にとってただの朝じゃないよ？

何しろ今日は待ちに待った学園の入学式！これから僕の輝かしい学園生活が幕を開けるワケです！

さあぐずぐずはしてられません！あまり寝ていたらバスに間に合いません！

「ふあああ～！」

僕は一つ大きなあぐびをします。そうです。これから僕の輝かしい学園・・・

『がさがさ・・・』

生・・・活・・・？

「・・・・・？」

今ナニ力動きました。僕の横で。ていうかなんか横がアッタカイ。

「ちよつと・・・これ何・・・？」

恐る恐る自分の横を触つてみると何か固い感触。

「・・・・広辞苑・・・」

「イヤ――――――！」

僕はベットから転げ落ちました。床に尻餅をついてケツをおさえます。

〈今なんか言ひたヨ！寝言とは認めたくない言葉ダヨー！〉

僕はそーっとベットの上から明らかに盛り上がっている場所を覗き込みます。

「あ、あのーー！」

僕は傍にあつた孫の手でその部分をつつきます。するとその物体は少し動きました。

僕はその人らしき形をした盛り上がりから田を離さずに叫びます。
だけど下からは返事がありません。まさか・・・まさか・・・

! !

僕は部屋の扉を思いつきり開けて階段を転げ落ちるように降りていきました。

卷之三

僕が駆け込んだリビングには母さんの変死体も父さんの惨殺死体もありませんでした。そもそも人を殺した犯人が僕のベットで一晩中添い寝なんてするわけがありません。

卷之二

僕はリビングのガウンドエアの上に置いてあるた

動搖している僕は警察の番号すら記憶にあります

三度聞違う言語をしてしまいましたが、三・七・九の（・・・）を押すことができました。

そして人の声。

גנדי

88

只今留守にしております。ご用件のある方は~~レ~~……

ンナアホナー！！！『誰に話す？』警察かと！」はおんじやう！！』の
クソポリ公がああーー！」

《チヨンチヨン》

「うつせーーー！今度あ自衛隊にかけてやりますがに留・・・

「もしもし？」

「僕は後ろから声をかけられたことに気づきます。

「はっ！誰！？」

そこにはまだパジャマ姿の男の子が立っていました。背は僕よりも
はるかに小さくまだ小学生って感じです。

「つていうかここ危ないよー？変体が一階にいるしもつすべ自衛隊
の一師団来るからさ！」

「自衛隊来るの？」

「そうつー留守でなきゃね！」

「そんなあせらな・・・」

「ええつと一番号わかんねえよーで、いつか電話帳に【自衛隊】って
項目があんのかどうか疑わしいよー！」

「こじがいちばん近いんじゃない？」

そつこつて側にあつた地球儀を指差します。

「えつー？どーどー・・・！つてこー】アメリカ合衆国つて書いて
あんじやんーそりや【軍隊】だよーこーの国潰すつもりですか！？」

「アメリカを馬鹿にすんじゃねーよー！」

子供が僕を急に睨み付けます。

「えつー？なんで逆切れすんのー？」

僕は横の地球儀を見て思います。地球つて、広いんだね。

「もういいつー！そんなら隣の【山田さん】にかけるよー！」

そういう捨てて僕は山田さんの家の電話番号を押します。

『トウルルル・・・』

「早く出るよー！」

『トウルルルルブチッ！』

「ええー？」

今電話がよく分からぬ音で切斷されました。

「な、なんでえー？」

そしてふと横を見ると・・・

「なんで切つてんの！？電話線切つたの！？」

横にいた子供が千切れた電話線を持つてニーッコリ。

「何ニーッコリしてんの！？なんで電話線千切ったの！？直し……」

『ズドン…』

「うわっ！」

目の前に何かの破片が飛び散りました。思わず目を閉じてしまします。

『パラパラ・・・』

何かが床におむる音がしました。僕は恐る恐る目を開けると・・・

「ヴァー！！！」

そこには無残にも粉々になつた電話機。もはや原型を留めていない。その物体は子供の手から破片となつて落ちています。

「なんてことしてくれるの！？ていうか君何！？恐ろしい演技見せないでよ！」

「僕が誰かつて？そんなに教えてほしいなら・・・」「ああいこよいこよーれつれと家出でつてよー・ビツセ寝ぼけてきたんでしょ？」

僕は子供の台詞を途中でさえぎつてさつさと帰るよつにいました。でもその瞬間、子供の口つきが変わつて。

「うつせーんだよ！！！黙れこのD級野郎があーー！」

そういうつて眼の前にいた可愛らしい子供は右手で僕を殴りつけます。

「ボベツ！！イ、痛アアー！！」

僕は左の頬に右ストレートを喰らう、ドチャツとぼくは床に頭から着地します。というか何といつ力でしょう。顔が変形したような気がします。

「な、なにすんのをあー？」

「・・・えつヒー」

「なにもじもじしひんのさーホラーー」つむけよーまつたく今日はなんて朝だつ！

僕はダムツつと床をふんずけます。そしてビームからか音がしている

」とに気がります。

『ジリリリリリリ・・・・・』

「く」の音は・・・・・

「しまつたああああ！――！」

なんてことでしょう。念のために僕がバスの時間に遅刻しないようにバス出発の10分前に設定してあつた目覚まし時計が音をたてているではありませんか！

『ズドードドドドドドドドズ』

僕は一階に猛スピードで上がつてこき、猛スピードですぐ戻つきました。僕はハアハア息を荒げながら。

「い、いないつ！あの添い寝変態がいない！」

「添い寝・・・・？」

横で僕の独り言を聞いていた子供が不思議そうに言っています。

「そう！消えたんだよ！まったくあのゲイ・・・」

「ああそれなら僕だよ？」

僕は耳を疑います。

「・・・なんだって？」

「それ僕だよ？」

「・・・なんだって？」

「それ僕だよ？」

「なんだブベエ！！」

右ストレートが飛んできました。

『ドバンッ』

僕は家の玄関の扉を蹴るようにして開けて外へ飛び出しました。

「遅刻しちゃうよ・・・・・！」

全速力で住宅街を駆け抜けます。あと5分でバス停に着かないと確

実に遅刻です。入学式早々そんなマネはしたくありません。

「ねえねえ、どこにいくの？」

「学校・・・って君またいたの！？さうせと・・・って早いよ！なんで僕の方が遅いの！？その体型でそのスピードって気味悪いよ！」

あの変態小僧はまだ僕について来ます（猛スピードで）

「ここの変態があ・・・！」

歯を食いしばりながら走る僕を横に変態小僧は樂々と涼しい顔をして走っています。

「よしつーここの曲がればすぐバス停だつ！」

そう言つて僕は住宅街の曲がり角を曲がります。続いて変態坊やも。

「やばつ！バス来てるよー！」

バス停ではバスがすでに出発しようとしていました。

「まつてください痛アツ！！」

僕の声は痛々しい叫び声でかき消されました。

「いつちやダメだよー！」

「離せッ！足を持つなアー！」

僕の足には駄々をこねるようになに変態小僧がまとわりついていました。ぼくはそのせいで転んでしまったのです。

「離せッ！離さネエとぶつ殺すぞ！」

もはや僕は狂氣と化していました。

ですが狂氣を制するには狂氣で制するしかありません。つまり変態坊やの勝ちです。

「ああ・・・行っちゃつた・・・！」

わずか3秒の間に巩固めをされて僕はノックアウト。バスは行つてしましました。

「あーあ

「あーあじやねえよ！行っちゃつたじゃんか！？バス行っちゃつた

よー? ビーヴすんのー? 僕! 「

「えつと・・・ペプシ飲む・・・?」

そういうてその子はどこからかペプシを取り出します。青い爽やかなパッケージが疲れた僕の心を少し癒すような気がします。

「うん・・・なんか納得いかないけど・・・」

そう言つてぼくは少年からペプシを受け取ります。

「ツテ何コレ? !? ヌルイヨー? むしろ熱いー・ビニから取つてきたのこんなもん!」

「ヒヒ」

そう言つて少年は近くにあつた自動販売機の・・・取り出し口を指差しました。

「テメエツ! そりやダメだろ? が! 知らないのー? そういうのって毒が入つてるんだよ! ?」

「・・・・・・」

すると少年は黙つて下を向いてしまいます。少し酷かつたかな・・・?

「あ、あの・・・御免よ? ホラ、泣かないでブバアア!」

「はあ~・・・」

僕はリビングのソファーにドサツと座つて深いため息を吐きました。あれからなかなか止まらなかつた鼻血をようやく止め、家に帰つてきたのは昼間の10時。もはや学校に行くのは今日はおあづけです。

「いつたいどうすればいいんかな・・・」

僕は家に帰つてきてからずつと冷蔵庫をあさつている少年を横目にしています。

警察に言つてもいいものでしょ? か。でもそつしょ? ものならあの子に殺されてしまう可能性も有り得ます。

ここは大人しく出て行くのを待つてている方がいいのかもしません。

でも僕の両親は朝からどこに行つてしまつたのでしょうか? いつもならリビングにいるハズなのに。

それよりもまずあの子の素性を知るべきではないでしょうか。そうです。それが先決です。

「ねえボク? 君の名前は?」

すると冷蔵庫をあさつていた手が止まりました。

「ペプシマン198世

どうやら頭は思つた通りです。

「ペプシマン? それってあの銀色の?」

「ああアレ? あれは僕の友達の親の友人の親戚だよ?」

「…要するに遠い関係なんだね?」

『ガチャガチャ』

さつきから冷蔵庫ばかりあさつて何をしているんでしょう。お腹が空いているようにも見えませんし。

「あつたー!」

そう言つてアイテムを手に入れた! みたいな格好で僕に見せたのはペプシコーラ。

「ソレを探してたの?」

「ウンツ! 僕これ大好きなんだー!」

そう言つて少年は栓をガシュツと開けて口の中に流し込みます。

「すごい飲み方…」

僕はその豪快な飲みっぷりにびっくりします。

「ブハー!! ウンメー!!」

「あの… それでようしかつたら君はなぜここにいるのか教えてくれるかな?」

すると少年はペプシをまたガボガボ流し込み答へました。

「えっと… 坂井マスオクンだっけ?」

「チゲーよ! マスオつてなんだよ! あんなに嫁姑の間に挟まれてストレス溜まつてそうな人に見える! ?」

「あ、じゃあせつかくだからマサオ」

「じゃあってなんだよ！それにせつかく！？ノリオだよ！ノーリ！？」

「オ！」

僕は空にカタカナでノリオと書きました。

「ノリオ・・・・？」

「そうつ！」

「んでノリストケ君！僕がここに来たワケはねえ！」

もう名前の誤字脱字は気にしないことにしました。僕はいつまでたってもヒラ社員。

「君と一緒にペプシの世界を救うためだよ！」

「ペプシ・・・・・僕ももらつていいかな・・・・冷えたやつ」

「ウン！」

「要するに・・・」うこううワケだな？」

僕は少年から聞いた話を頭の中で整理します。

どうやら今、少年の住んでいるペプシの世界は戦争で負け、隣国のコカ国に統治下にいるそうです。

コカ国はいい国なのですがコカ国の中には『国民はコーラ以外飲んではいけない』という法律があるそうです。ペプシ国やコカ国もジンジ国も飲み物だけで生きていける人たちがいるそうです。

だから固形物を食べなくても生きていけるのですがペプシ国の人々はみんなコカコーラが苦手。とても三食コカコーラは耐えれないそうです。

そんなワケで現在のペプシ国はとてもお腹が空いているそうです。

「・・・んで、この僕にペプシ国を救ってくれと？」

「んつんつんつ・・・・うだよ！頑張ってね！」

少年は5本目のペプシに突入します。

「えっと・・・その前に君の名前を・・・ってアレか、ペプシマン
198世か・・・でも呼びにくいよ。非常に。何かあだなとか無い
の？」

「みんなからはボスって呼ばれてるよ?」

「ふ、ふーん・・・えつと・・・ボ・・・ス・・・って言いにく
いよ！なんかメツチャ抵抗ある！」

「おーサブ朗！例のモン持つてこい！」

少年は眉間にしわを寄せています「みを聞かせて言いました。

「へ、ヘイツ！只今、ボスつ！」

「あはは！オモシロー！」

「つて何言わせんじゃー」「うーつていうか今のはボスじゃなくて親
分のほうが妥当じゃない？」

「どーでもいいんだよ！コノ萎え《ピー》」

「ちょ・・・！だめだよ！そんな卑猥な言葉使つたらー！これたぶん
純粹な人も多少見てるよー？」

「え？？」

少・・・いえ、ボスと呼びましょう。少年とタイプするのはメンド
クサイです。ボスは首を傾げました。

「実はこの物語は全てノリオ君の夢の中での・・・」

「言つなよ！つていうか嫌だよ！そんなバッドヒントイングはー！」

「恥ずかしがつちゃつて」

もうつづいて行けません。

「痛アアアアアアアッ！――！」

僕の家に裂けるような叫び声が響きます。そしてその通り今僕は裂
けそうなのです。

「もうちょ・・・つと一足開いて・・・！」

「ヤメテヤメテ！！！股が裂ける！なんでそんなに開くの…？もつ180度以上になりそうだよ！？」

「あと・・・半分・・・！」

「オホホホイ！！それじゃ折りたたんじゃうよ…」

「じゃあ降参？」

「降参降参！！！大本営発表しちゃつてもいいからあ…！」

・・・なぜこんな悲惨な事になっちゃったのか、説明しましょ。う。

—10分前—

「ねえ、じゃあ早速ペプシの国に行こう！」

「まつてよ、それには色々と準備があるのでしょ？っていうかペプシの国つてどこから行くの？」

あれからなんだかんだあって自分の身の危険を感じた僕は大人しくボスの言つことを聞いてペプシ国に行くことにしました。

「えーっとねえ、結構身近なもんだよ」

「クイズかよ・・・。ん~。身近なものかー。それってどんなの？」

「穴」

「穴？ん~、マンホール？」

「違うよバーカ」

「えーっと・・・トイレの穴？」

「じゃあ行つてくれば？」

なんでしょう。身近で「穴」そつとしたら・・・あそこもありなのでしょうか・・・？」

「肛門？」

「じゃあ行つてみよー！！！」

「え？つて何すんの？ちょ！僕の足をそんなに広げて・・・！イタアアアア！！！」

僕は股関節を押さえながら悶絶しています。もうバレエでもなんでもできそうな気がしてきます。

「さあ行ぐぞーー！！！」

「ヴァギナーラー！」

ボスは僕の片足を掴んで家中を玄関まで激走。ボスは靴をはいてまた再開。

二十九

ボスは僕の声に耳をまつたく貸さずに激走！激走！そしてしばらくして僕がさんずの川を見始めた頃、やつと止まりました。

本居宣長著「日本の歴史」

僕はその二回でリの向こうを三回抜いていたおじいちゃんに足り

「だよ～！！」

そう言つてボスが指差した先は・・・マンホール。

「たゞでたじやん！ もうきの正解たゞたよ！ 僕！ なんて嘘うべの

—そんなこと知りません

こいつはいつかシバキます。
絶対。

- 108 -

そう言つてボスは大きく息を吸い・・・

「開け―――ペプシー。」

『・・・・・・・・・・・・』

「・・・・・ヒ、いつパフォーマンスもあるとこつワケで・・・」

結局マンホールの蓋はボスが力ずくでこじ開けました。恐るべし。ペプシマン。

マンホールの中は不思議な事に水の音が聞こえませんでした。
やはりあるのでしょうか。ペプシ国は。

「さあ・・・! 行つてこーい! ！」

『ガスツ! 』

「ダフー! ！ ！」

僕は漆黒のマンホールの中に蹴り落とされました。

さて、これからどんな冒険が始まるのでしょうか。
ノリオとボスの冒険はまだ始まっています。これから始まります。

でもそれはまたの次回に・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8412a/>

すべて転んでペプシを飲め

2010年10月15日02時27分発行